

2014 CSR 報告書





LE
LMA

MA
MA

MA
MA

Tabac

和光



平素は格別のお引き立てを賜わり厚く御礼申し上げます。
弊社は世界がリーマンショックに揺れた2008年より、
CSRを経営戦略の根幹に据えた事業活動を展開して参り
ました。

1959年の創業より長きにわたってお世話になってきた地
元横浜、地元大口のために、地域の役に立つ存在でいよう
と、社員全員が力を合わせて様々な取り組みをして参りま
したが、ようやくこのように少しまとまった形で報告させ
ていただける準備が整いました。

これらの事業が実施できましたのも、偏にご支援・ご協力
いただきました皆様のご厚情の賜と心より感謝申し上げ
ます。

まだまだ未熟で発展途上の会社ではありますが、是非本書
をご一読いただき、今後の更なる成長のために、忌憚のな
いご意見、叱咤激励など賜われれば幸いです。

2014年11月

株式会社協進印刷

代表取締役社長 江森克治

CONTENTS

- 3 特別対談 関口昌幸 × 江森克治
『脱学校の社会』から始まるイノベーターな未来
- 10 CSR 取り組み報告
- 11 コンプライアンス／環境
- 12 情報セキュリティ／品質
- 13 雇用・労働安全
- 14 社会貢献・地域志向
- 15 情報開示・コミュニケーション
協働事業報告
- 17 ぼうさいえほんプロジェクト
- 18 ヨコハマ・パラトリエンナーレ 2014
- 19 スローレーベル
女性活躍推進プロジェクト
- 20 産学協働プロジェクト
- 21 各種認定
- 22 第三者評価 横浜市大 CSR センター長 影山摩子弥氏



特別対談

横浜市政策局

株式会社協進印刷

関口昌幸×江森克治

『脱学校の社会』から始まる
イノベータータイプな未来

「学校的な社会」からどうやって抜け出すのか

江森：私が関口さんのことを「この人はすごい人だ！」と思ったのは、今年の1月に開催された、長年寿町の支援をされてきた村田由夫さんの講演会で、関口さんと寿町との関わり、村田さんとの関わりのお話を聞いたときなんです。もちろんその前から存じあげて「変わった役人だな～」とは思っていたのですが（笑）、あのときフェイスブックにイヴァン・イリッチの『脱学校の社会』について書かれていましたよね。あれを読んで完全にヤラれました。「なんて素敵で役人がいたものか！」って。イリッチは学生の

頃に名前を聞いた記憶はあったのですが、本の中身はすっかり忘れていて、慌てて買い直して読みましたよ。

関口：いや、私も江森さんが「今日はイリッチから入ります」というのでとても驚いています。さすがは江森さんだな～と。

江森：イリッチのいう「学校的なもの」、つまり制度によるサービスにくるまれて、その内部にいる人間が目的と過程をはきちがえてしまう、平たく言えば自分で何も考えられないような人間が大量生産されてしまう状況というのは、経済の発展と不可分であって、経済が発展すればするほど、我々が経済合理性を求めれば求めるほど、「学校的なもの」があっちこちにてきてしまうわけで



すよね。

関口：まさに近代社会の弊害ということですね。

江森：関口さんが取り組んでおられるニート・ひきこもりの若者にしても、それは「学校的な」社会が必然的に生み出す産物であるわけです。一方で、我々は企業人として日々経済活動をして経済合理性を求めている

る。その狭間でとても悩むんですよ、経営者としては。

関口：私は『脱学校の社会』は早すぎたと思っています。70年代の半ばぐらいから近代がゆらぐわけですが、それまでは「学校型社会」について、つまり生産効率性を最高の価値軸として、規律を守ったり、規則正しい生活をする、イノベーティブなことよりは近代社会に適應できる身の処し方を教え込むところが学校だよ、ということには誰もが疑いを持たなかった。そこに、未来永劫に社会は本当にそれで回っていくのか、本当にそれでみんな幸せなのかと疑問を投げかけたのがイリッチだったと思います。ところが当時はラジカルな反体制の主張というか、結局は経済成長のラインから外れた異端の主張にすぎないと考えられていました。

しかし90年代から経済のグローバル化が進展してきて、世界がフラット化し、日本の製造業も空洞化してきていますよね。そうなったときに、今までの学校型、工場型の身の処し方で良いのかとか、今までの「学校型社会」のまま、新たな産業や仕事を創っていく感性が若者たちに育っていくのかとか、そういうことを考えるときに、もう一度この本に立ち返るべきではないかと思っ

ているのです。

江森さんがやっていらっしゃることで、私はまさにそれだと思うんですよ。最初は地域貢献企業としてモラルをもって会社経営をするというところから始められましたが、単にモラルの問題にとどまらず、CSRを会社の活性化や、新しい事業を生み出す良い意味でのツールとして活用しようとしている。もしかしたら、これまで近代的な生産性や効率性を学校的に追い求めてきたことに対する企業人としてのアンチテーゼなのかなと。確かに今は少数派かも知れませんが、協進印刷さんの取り組みは、今後5年10年を考えたときには、地元企業が横浜の課題を解決しながらイノベーティブな仕事を生み出して行くときの、モデルになる取り組みではないかと思います。

江森：なりますかね〜？(笑)。いや、もちろんこういう取り組みをしていて、間違っているとは思っていませんし、いずれそういう時代が来ると信じていますが、一方でどうにも抗うことのできないグローバル化の流れとか、市場の論理に直面し、呆然と佇んでしまうときもあります。

急速に広がりつつあるオルタナティブ経済の萌芽

関口：いま LOCAL GOOD^{*1}で3つのプロジェクトがクラウドファンディングにエントリーしていますが、この3つのプロジェクトは今の市場経済に対してノーをつきつけるだけではなくて、オルタナティブな仕組みを提示しています。これはまさに江森さんが企業でやろうとしていることをNPOや社会福祉法人でやってきていて、それがここ3、4年で急速に芽生えて来ているように感じます。

例えば「いのちの木」さんでやっているような、子どもと同居するために知らない土地に来て引きこもってしまった「呼び寄せ

高齢者」の方々の編み物の技術を活かして、コミュニティカフェに集っておしゃべりをしながら編み物の仕事をする。もちろんそれだけでは商品としては売れないので、そこにアーティストが関わることで魅力的な商品となってあつという間に流通するというようなことが起こり始めています。

また、「ファールニエンテ」さんでは、障がいを抱えている方が小麦から育ててパンを焼いているのですが、このパンも20年以上かけて本当においしいパンが焼けるようになった。そこで今度はイタリアンレストランをオープンして、障がい者だけで焼くパンを地域に広めていこうとしている。障がい者が小麦を栽培し、パンを焼いて、レストランで提供するなんて、昔では考えられないことだったと思いますが、それが今この大都市横浜で現実になるうとしている。これまで工賃の安い単純作業の仕事しかなかった障がい者が、自らの持つ潜在的な能力をフルに発揮してイノベティブな、6次産業的な仕事をし始めているというのも、ここ数年だからこそその動きだと思います。

そのようなことを企業の立場でいち早く始められたのが協進印刷さんですから、その意味付けや価値付けを、いまの時期だからこそしっかりやっておく必要があると思います。

地域を守り、世界で勝つコミュニティ経済の真髄

江森：横浜市としては、いま関口さんがおっしゃったような新しい経済で、100年とか200年後の「横浜市」という地方自治体がまわっていきと考えているのでしょうか？

関口：それには2つの側面があると思います。ひとつ目はいわゆる「福祉的就労」という側面です。私は今の職場の前にはニート・引きこもりと言われる若者たちの就労支援をしていたのですが、その多くが障がい者ではないのだけれど、軽度の発達障害などを

抱えたグレーゾーンの若者たちでした。こういう人たちについては、やはりある程度企業の中でもケアをしてもらいながら、地域社会に見守られながら働いていくことを通じて、経済的に自立していくということが横浜市としても大切なことと考えています。というのは、若年者の生活保護費はこの10年で3～4倍に増加しているのですが、もはや困難を抱える若者を財政的に行政だけで抱え込むことができなくなってきていて、そういう若者たちが就労を通じて自立できるようにしていかなければならない。といっていきなり大企業に就職するのも難しいから、地元でお金をまわしつつ、困難を抱える人たちの雇用を支えていくような仕組みを作らなければならないということで「コミュニティ経済」という政策を打ち出しています。

先ほどもいったようにここ数年で、セーフティネットとしてのコミュニティ経済というのは、ある程度うまくまわり始めているように思いますが、同時にグローバル経済に対抗していくためには、新たな価値を生み出していかなければなりませんので、そう



したニートの若者や障がいのある方と、地元企業がどうコラボレートしてイノベティブな価値を生み出せるかというのがポイントだと思います。そういう中から世界市場に通用するようなビジネスモデルができて、なおかつ地域の中でお金が循環するような仕組みが両立できると、経済合理性一辺倒のグローバル経済への対抗軸になると思います。

江森：そこで私がいつも難しさを感じるのは、新しい価値を生み出すということは、単純労働から複雑でクリエイティブな仕事に日本中がシフトしていかなければならないということだと思いますが、先ほどから話題に上っている困難を抱えたグレーゾーンの人たちにとっては、複雑な仕事はとても難しい。つまり経済が新しい方向に動けば動くほど、セーフティネットとなるような単純な仕事が減ってってしまうというジレンマがあるのです。それを解決するには困難を抱える人や障がいを抱える人の中から、新しい価値が生まれていかなければならないのですが、これが難しい！



関口：本当にそうですね。でも、まさにそれができるかできないかが大きな分かれ目だと思います。私がニート・引きこもりの支援をした経験からいうと、10代後半ぐらいまでに支援を受けなければ、将来的に自立できる可能性はすごく高くなるのですが、途中までは普通に働いていたのに20代になって何かが

あって引きこもってしまって、仮に30代後半から働き始めようと思っても非常に厳しい状況になる。だからこそ10代の若いときから、仕事について学ぶ場を与えてあげることで、その子の可能性はどんどん高まってくると思うんですよね。そういう意味では協進印刷さんの中高生に対するキャリア教育の取り組みはとても意味があります。

進学神話の崩壊 ～子どもに「実学」の場を

江森：でも、子どもが地元の中小企業に就職したいとあって、真っ先に反対するのは親なんですよ（苦笑）。これだけ大量生産が否定されて個性の時代だとか言っている割には、子どものキャリアに対する親の意識がとても遅れていて、そこはまさに「学校的な」システムに絡めとられている典型的な構図ですが、親がいまだにいい学校にさえ行っておけばなんとかなると思っているわけです。

関口：そうです。もうそんな実態はまったくないにも関わらず。むしろ今は大学の中退率が高くなっていて、また卒業後も無業の人も増えています。昔と比べて大学の進学率は上がっているわけですが、それは仕事がないのを単に先送りしているだけなんです。江森：大学進学は幻想であることを親にわからせないといけませんね。

関口：そんな中で協進印刷さんの取り組みで素晴らしいと思うのは、デザイン系専門学校とのCool Yokohama Projectの取り組みです。協進印刷さんとしては社会貢献の一環だと思いますが、学生にはとても貴重な経験の場を与えていますよね。今回も横浜デジタルアーツ専門学校とNPOのOICHI^{*2}さんとコラボして、「i r o i r o」という情報誌を発行して、地域活性化のために情報発信に取り組んでいます。これはある意味とてもイノベティブ

ブなことだと思います。もっといえば、専門学校にいく子たちは世間からは大学に進学する子たちより偏差値が低いと思われるのかも知れませんが、実はこれだけのことができるんだぞということを情報発信していくのは大事なことだと思いますね。

江森：専門学校の生徒たちは、なまじ三流四流の総合大学に通っている学生よりよほどいいですよ。自分たちのやっていることが絞り込まれて明確になっている分、余計な迷いが無いというか、イキイキしているなというも感じます。

関口：そうなるとう学校教育の問題になってきますね。近年の流れとして工業高校や商業高校を廃止して「総合高校」を作ってきたわけですが、そのために社会に出てから役に立ついわゆる「実学」を学ぶ場が失われていると思います。とって従来工業高校や商業高校にそれが担えるとも思っていないので、「実学」を学べる新しい高校を作る必要があるのですが、今のところその役割を担っているのが専門学校ということでしょう。そこに江森さんたちのような企業が連携して若手人材を育て、卒業生が横浜で就職するという流れができればベストですよ。

江森：江戸時代でいうところの「小僧」ですよ。小僧さん時代をどこで体験させるかという問題なのだと思います。企業はもはや小僧を抱える余裕がなくて即戦力を求めていますから、入社したらいきなりワンランク上の「手代」のような仕事をさせられるわけです。だから壁にぶつかって引きこもっちゃったり、心を病んでしまったりするのだと思います。だから学校に通いながら、たまに企業に研修に行って、掃除したり、先輩に叱られたりしながら、社会で働くための基礎を身につける。そういうことをやらせてくれる学校があってもいいと思いますね。

関口：その通りです。田奈高校がやっている「バイターン」がまさに小僧の期間をつくる取り組みです。バイターンが職業体験と違うところはバイト料がもらえるということですよ。お金が発生

するからやはり厳しいわけですよ。遊びじゃないんです。高校生だからできることなんてないんですけど、そこで働くための所作というか基本を身につけることで本人にとっても自信になると思います。そういうことを仕組みとして作り、社会全体で子どもを鍛えていくプラットフォームに高校がなれば、ニート・引きこもりの問題などもずいぶん違ってくると思いますね。

江森：田奈高校の中野校長先生によると、その際にネックになるのが文科省が定めている普通科高校のカリキュラムで、普通科の授業は全部消化しなければならないので、キャリア教育の時間がなかなか作れないとのことでしたが、そういう高校を横浜市が独自で作ることはできるのですか？

関口：例えばサイエンスフロンティア高校はすごく特殊な学校ですが、あれを作ることはできたわけですよ。同じような発想でいえば、もっと実学をしっかりやっていこうという高校は市立高校であれば作れます。江森さんがいうように、地元のニーズにあわせて学校のあり方も変えていくということ、やっていかなければいけないのだろうと思いますし、地域を活性化していくような人材を地元企業も一緒になって10代のうちから育てなければならぬ。田奈高校のバイターンを応援しているのは、田奈高校がきっかけとなって、本当の意味でのクリエイティブスクールができればと思っているからなのです。

江森：はじめてバイターンの話を聞いたときには、田奈高校の生徒を受け入れて職業訓練をしてあげるという社会貢献をするのに、さらにバイト料を払わなければならないというのは、ちょっと企業にとっては負担が重いと思ったのです。しかしその後ウチでもいろいろな子を受け入れてみて、先ほど関口さんいわれた「お金が発生している」ということが、逆にいい意味での緊張感となることがわかって、バイターンの良さも理解しました。ただやはり企業としては、人材確保につながるかも知れないけれど、ずっ



関口：その通りですね。その顔の見える関係というのがソーシャルキャピタルになっているので、そこがグローバル経済と対抗できる強みだと思います。LOCAL GOODはバーチャルな仕組みではありますが、そこにいかにリアルを融合させられるかということがポイントになりますね。

コミュニティ経済の国際貢献とは

と持ち出しになるかも知れず、やはりそのあたりのケアを社会全体としてどうやっていくかというのは課題だと思います。企業だけに押し付けて良い話ではないですからね。

関口：まったくその通りですね。横浜市の生活保護費は1000億を超えています。バイターンをはじめとする若者人材育成の取り組みで生活保護が減るのであれば、その分の費用をサポートにまわすことができます。ある意味投資ですが、昔は公共事業で道路や橋に投資することで経済が活性化したわけですが、単なる授業料免除のような投資ではなく、バイターンのように人を育てながら地域でお金が循環する仕組みに投資することは、これからの時代の公共事業として必要なことだと思います。

江森：人材育成は、まさに産学官が一体となって取り組まなければいけない課題ですよ。

関口：そうやって地域ぐるみで育てた人材が、世界に通用するビジネスアイデアなり、コンテンツなりを生み出して、さらに地元のお金もまわしていけるような仕組みが描けるといいなと思いますね。

江森：コミュニティ経済の場合はコンテンツの善し悪しはもちろんですが、「誰がやっているか」ということも大事な要素ですよ。

江森：先ほどから経済合理主義の限界について話しているわけですが、私の知り合いが児童労働撲滅のNGOをしていて、アフリカなどで児童労働に無理矢理従事させられている子を救出するなど、とても素晴らしい活動をしています。しかし本質的に考えると、児童労働自体は、経済がグローバル化したことで先進国から単価の安い仕事が途上国に流れることによって起こっているわけで、児童労働を撲滅するには、自分たちを苦しめている経済合理性の追求を自らがしていかなければならないという大きな矛盾に突き当たります。結局経済的繁栄は、子どもや女性など社会的に弱い立場の人の犠牲の上にはか成り立たないのかと思うと、途上国を経済的に支援することも良いことなのかどうなのか迷うことがあります。

関口：どの国も近代化の初期の頃には児童労働はあったわけですよ。もちろん日本だってそうで、無着成恭の『山びこ学校』に描かれているように畑仕事をしなければならぬから学校に行けないみたいなことが戦後ですらあったわけです。実は日本も児童労働がなくなってからそんなに時間は経っていない。そう考えると、現在児童労働がある国でも、いずれはなくなっていくと思い

ます。しかし問題は日本が高度経済成長してきた時代と、いまの時代とは違っていて、ひとつには経済がグローバル化しているが故に、途上国にとってのメリットのようなものがなかなか見いだせなくなってきているということが挙げられるでしょう。もうひとつはエネルギー問題で、このまま化石燃料を使い続けていたら地球そのものがもたないのは明白ですから、日本が経済成長してきたのと同じような形では発展しないだろうと思います。

その2つを考えた上で、地域のコミュニティ経済が、他の地域(国)のコミュニティ経済とつながっていくのかというのは大きなポイントだと思っていて、これはきっと国レベルの話では難しいのだろうと思います。

江森：なるほど、国境を越えて地域同士がつながっていくということですね。私が横浜青年会議所(JC)の現役だった頃、2005年にそれこそ横浜型地域貢献企業の元となる提言をしたのですが、そのとき一緒に「都市間FTA」に関する提言もして、翌年の国際JCのアワードを受賞したことがあります。その時も国同士ではいろいろなしがらみもあり、フリートレードの交渉なんて進まないから、いつそのこと横浜JCが姉妹締結をしている都市と直接貿易協定を結んでしまえという提案でした。それを貿易だけでなく、EPAのように人の交流や支援も含めてやっていけば、グローバル経済に巻き込まれることなくやっていけますね。

関口：その通りです。いやあ、やっぱりJCはすごいですね。私は地域の中でのJCの存在は大きいと思います。JCは国も動かすことができるし、海外のJCを通じてつながることもできる。グローバル経済を支えている企業ではなくて、地域を支えている中小企業が集まってJCのような活動を通じて、直接海外の地域とつながりをもちながら国際貢献していくというのは、大いに可能性のある話だと思いますね。

江森：国際貢献の形が少し見えたような気がします。これまでの

国際貢献って「手ばなれ」が良すぎちゃって実感がないというか、相手が見えないんですね。効率優先の企業だとえてして「手ばなれ」のいいのを好んだりもしますが、私の場合は国際貢献よりも足下のことが優先だろうと思ってたんですよ。でも都市間でつながることができれば、相手の顔を見ながら相手の事情に配慮して貢献活動をすることができる。こちらから人や技術やサービスが向こうに渡っていけば、当然向こうからも人や文化や情報が渡ってくるわけですから、これはお互いにとって大きなメリットですね。

関口：今日この場所にいるから言うわけじゃないですけど(笑)、横浜は開港の地であり、元々横浜商人という社会起業家のスピリッツを持っている街だと思うんですね。そういう新しい国際貢献の形というのも横浜ならできると思いますし、先ほどから話しているニート・引きこもり問題の解決にもつながると思います。

江森：本日お話をさせていただいて、弊社の事業の方向性を再確認すると共に、国際貢献も含めた新しい取り組みのヒントをいただきました。これからも大好きな横浜と共に発展していけるようがんばります。ありがとうございました。

*¹LOCAL GOOD YOKOHAMA
NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボが運営する地域課題解決のマッチングサイト。クラウドファンディング、オープンデータなど先進的な仕組みを実装して地域の活性化を図っている。
<http://yokohama.localgood.jp/>

*²NPO法人協同労働協会 OICHI
年金制度の崩壊とともに将来不安が増大する中、「生涯現役」を掲げ起業や共同労働などの自立支援を展開している。今年6月には、たまプラーザに起業家の拠点「まちなかbizあおば」をオープンした。
<http://www.oichi.org/>

	<p>関口昌幸さん 横浜市政策局政策部 政策課担当係長 1988年横浜市入庁。 2002年から都市経営局で全市の総合的な政策指針や長期ビジョンの作成に関与。2006年「こども青少年局」の発足と同時に、同局企画調整課に異動。引きこもりやニートなど困難を抱える若者たちの自立を支援するための包括的な施策形成と事業推進を担当。2012年4月1日より現職。横浜市におけるオープンデータ推進のための官・民の体制づくりを担っている。</p>
--	--

CSR取り組み報告

CSR 基本方針

株式会社協進印刷全社員は、自らが地域社会の主体であるとの自覚のもと、地域社会および地域経済の重要性を認識し、ステークホルダーからの期待に応え、本方針に基づき本業を通じて社会の持続的発展に貢献することを約束いたします。

本業を通じた社会への貢献

進取の精神と不断の努力により培われた技術力を基盤として、誰もが安全かつ便利に利用できる良質な製品・サービスをお客様に提供することにより、人びとの心と心が通い合う優しさ溢れる社会の実現に貢献します。

環境保護活動の推進

持続可能な社会の実現に向けて、全ての事業活動において環境に与える負荷の低減を目指します。また環境対応製品の製造を通じて、環境保護への啓蒙活動を推進します。

社会貢献活動の推進

共に地域に暮らす市民として、地域住民との信頼関係を構築し、文化芸術振興および青少年育成に重点をおいた社会貢献活動を積極的に推進します。

働きやすい職場作り

働くこととは公に奉仕することであるとの認識のもと、地域住民を積極的に雇用し、全ての社員にとって、働きやすい、やりがいのある職場作りに努めると共に、意欲ある社員の豊かな人生を応援します。

法令遵守

法治国家における責任ある市民の一員として、事業活動における各種法令の把握に努め、それらを遵守します。

継続的改善による取り組みのレベルアップ

毎年度当初にステークホルダーニーズの析出を実施し、経営と一体化したCSRの目的および目標を定め、マネジメント・システムの運用を通じて改善の努力を継続します。

2014年8月改定

権利への理解と倫理観の醸成

「協進印刷のことば」というハンドブックを作成し、毎週朝礼で読み合わせをするとともに、その言葉についてどう考えるか意見交換を行い、従業員同士の専門用語の理解と倫理観の醸成に役立てています。また、公益財団法人著作権情報センターにご協力いただき、『はじめての著作権講座』という冊子を学校・教育機関を中心としたお客様に配布させていただきました。著作権についての理解と事故予防に役立てていただけるよう努めています。

子供たちに美しい自然をのこしたい

環境保全の声が高まる中、私たちもできることからひとつひとつ丁寧に活動しています。グリーンプリンティング認定・クリオネマーク*の取得運用、パンフレット等を活用した環境配慮印刷の啓蒙活動、ゴミの分別・再資源化、再生紙の利用、有機溶剤の使用量削減など、さまざまな環境活動に取り組んでいます。

*グリーンプリンティング認定：

環境に配慮した印刷製品が広く普及することを目的とし、日本印刷産業連合会では、独自の基準に達成した工場・事業所を認定。

*クリオネマーク：E3PA（環境保護印刷推進協議会）が定めた「環境保護印刷マーク」のことで、環境にやさしい生産活動に取り組む印刷業界のシンボル。



Understanding the rights and fostering the ethics

We made a handbook called “Words of Kyoshin Printing”, and we read through the words together at the weekly morning meeting. We exchange our views and opinions about the words to help understanding of the technical terms and fostering a sense of ethics among the employees. In addition, we made a booklet called “the first lecture about copyright” with the cooperation of Copyright Research and Information Center(CRIC), and distribute it to schools and educational institutes for free. We are working to help better understanding and preventing accidents of copyright.

Let's keep the beautiful nature to children

As the importance of environmental protection rises, all of us are carrying out some activities one by one. We got and operate the Green Printing Certification and Clione-mark*, and are trying to illuminate those eco-friendly printing system. We are also working actively on sorting and recycling of waste, using recycled paper, and reducing the use of organic solvents, etc.

* Green printing Certification is issued by Japan Federation of Printing Industries for the factories and offices that have achieved on its criteria in order to promote those companies and widely spread the eco-friendly printed matter.

* Clione-mark is "environmental protection printing mark" which is a symbol of a printing industry that work on eco-friendly production.

2013年度CO₂および産業廃棄物排出量・リサイクル量

排出

項目	排出量	前年比
CO ₂	29.5t	82.6%
廃油	0.25t	88.0%
廃アルカリ	0.1t	61.3%
廃プラ	0.07t	124%
事業ゴミ	3,195ℓ	182%

リサイクル

項目	排出量	前年比
紙	23.5t	76%
アルミ	1.7t	92%

お客様の大切な情報を守るために

情報セキュリティ対策のマネジメントシステムを確立し、平成25年度に印刷業情報セキュリティマネジメントシステム（PISM）認定を取得致しました。また、「保護情報取扱注意パネル」を作成し、取引先の企業宛てに配布させていただきました。情報セキュリティ対策の理解と事故予防に役立てていただけるよう努めています。

質の高い製品やサービスの提供できる理由

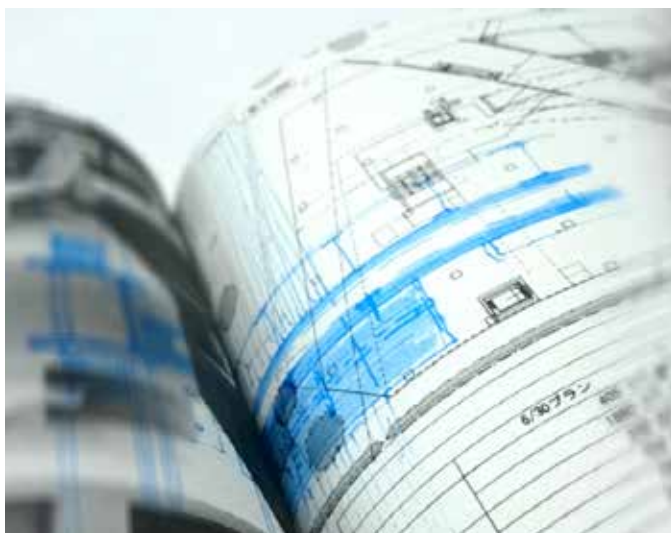
より良い製品づくりとサービス向上のため、定期的に交流会や勉強会を行っています。協力会社との交流会において、専門的な製造工程や最新の技術動向などを共有しながら、信頼関係を構築しています。また、社内勉強会の「協進カレッジ」を定期的に開催し、印刷に限らず幅広い知識の習得に努めています。

To protect the customers' important information

We established a management system of information security measures, and got the Printing Information Security Management System (PISM) authorization in 2013. We made a panel of “Precautions for handling of protected information” and distributed it to the companies of our clients. We are trying to help them understand the information security measures, so that they can prevent the accidents.

Offering high quality products and services

Kyoshin Printing conducts workshops and seminars periodically in order to develop better service and products. We hold the exchange meeting with the partner companies, and share the latest technical trends and manufacturing process, so that we can build a better relationship with them. In addition, we regularly hold in-house workshops, named “Kyoshin College”, and strive to learn a wide range of knowledge beyond ‘printing’.



未来を担う若者たちとの出会い

2013年11月～2014年1月に「横浜型若者就労支援事業」を通じて、3名のインターン生を受入れました。今年度も継続事業として、「横浜市就職サポートセンター」から9月までに2名の受入れを行いました。この事業は、横浜市経済局と社団法人横浜市工業会連合会が連携して実施したもので、「若年者の就労機会拡大を図るとともに、市内ものづくり企業の担い手の採用を支援するため、インターン実習を柱に研修から採用までの一貫した就労支援プログラムにより、求職中の若者と求人企業とを結びつける」ことを目的としています。

社員の心と身体の健康のために

事業計画にも掲げた「いきいきと働ける職場環境づくり」の実現にむけ、神奈川県印刷工業組合の産業医委託契約のサービスを活用し、社員と産業医との面談を実施しました。この制度によって当社のような小規模企業でも、手軽に専門医によるカウンセリングを受けることができました。自覚症状のない病気の早期発見につながることを期待しています。

Meeting the young people who will lead the future

We have accepted three interns from November 2013 to January 2014, and two other interns during April- September 2014 through "Yokohama youth employment support project". This project is conducted jointly by 'Japan Yokohama Industry Association Federation' and 'Yokohama City Economic Affairs Bureau' in order to increase the employment opportunities for young people and support the adoption of the successors of the manufacturing companies in Yokohama. It is intended to connect the young job seekers and the employers through the consistent employment support program which covers training to employment, based on internship program.

To protect the employees' health of mind and body

Toward the realization of "Making the good work environment", which is listed in our business plan, we made the employees have a consultation with an industrial physician this year. Because of the contract with Kanagawa Print Industry Association, we could have counseling from a specialist easily. We hope it will lead to early detection of asymptomatic illness.



子供たちに働く楽しさを伝えたい！

中学生、高校生、専門学校生、第二新卒生など、職業体験的なものから実践的なインターンシップまで、学生の受け入れは年間を通して随時実施。毎年冬期には約3週間、台湾貿易センターからの研修生も受け入れています。また、出産等により一時的にキャリアを離れたママたちの社会復帰応援プログラムにも積極的に参加。自閉症や発達障害の学生受け入れも始めています。

クールジャパン！若手クリエイターを応援

がんばる若手クリエイターへ、積極的に応援活動を続けています。年4回延べ約1500部発行している社外報「JO」の裏面を作品の発表の場として提供。また、今年からスタートしたTTTプロジェクトでも、「繋がるプロダクト」をキーワードに、製品づくりの機会や、企業との協働を体験できる場も提供しています。



Let the children know the joy of working!

We accept interns from junior high school, high school, technical school and the other young job seeker. The program is sometimes practical and sometimes job experiencing. We also accept a trainee from the Taiwan Trade Center for three weeks every winter. We are supportive to mothers who had temporarily left the carrier for childbirth or other reasons and are trying to come back to work. We began to accept the students of autism or developmental disability.

“Cool Japan!” Supporting the young creators

We have been supporting the young creators, providing a space to show their artworks in our newsletter, named “JO”. We publish it four times a year and send it to our stakeholders a total of 1500 copies. Furthermore, through “TTT project”, we provide the young creators an opportunity to make products and have an experience of working with a company.



小さな微笑みを届けたい「ありがとうの日」

ステーキホルダーの皆様へ日頃の感謝の気持ちをこめ、毎月10日を“ありがとうの日”として、ささやかな贈り物や、近隣でのボランティア活動などを企画しています。毎回変わる担当チームが企画から制作までを担い、さまざまなアイデアやおもしろグッズが生まれています。みんなの笑顔がうれしい取り組みです。

ご近所ランチ

毎月1回、持ち回り当番のホストが選んだ近隣の飲食店で、社員全員と一緒にランチをします。普段あまり話す機会のない同僚ともランチをしながら気楽に話することができる場を提供しています。近隣の店舗を利用することで地域経済にささやかな貢献ができるほか、飲食店の方から地域の情報を得る貴重な機会になっています。

Giving a smile with appreciation

The 10th of each month, we give a small gift or carry out a volunteer activity in the neighborhood to express our appreciation to the stakeholders. Each time, a team is formed, and takes charge of planning and producing. New ideas and interesting items are made every time. We are glad to see people smiling.

Neighborhood Lunch

Once a month, all employees have lunch together at a nearby restaurant where the host person chose. This gives us a good opportunity to talk with colleagues who usually have less chance to talk. We can have a small contribute to the local economy by using the restaurants in the vicinity, and sometimes get the local information there.



ステークホルダーとの相互理解のために

ステークホルダーの皆様との相互理解を深めるため、社外報『JO』を1年に4回毎号約500部発行しています。特集の対談記事をはじめ、活動報告、地域情報・社会課題・文化活動等々を掲載し、弊社の理念や取り組みを紹介するのはもとより、読者が新たな気付きを得られるような情報提供を心掛けています。

For a mutual understanding with stakeholders

We publish a newsletter “JO” four times a year, about 500 copies each time, to have a mutual understanding with stakeholders. It has an interview article, an activity report, local information, social issues and cultural activities, etc.. We introduce our philosophy and initiatives, and are also trying to provide information that the readers can get a new perception.



ぼうさいえほんプロジェクト

partner 横浜市共創推進室
横浜市総務局危機管理室
公益社団法人横浜市幼稚園協会

小さな命を守りたい

横浜市との公民連携事業として、『ぼうさいえほん』プロジェクトを企画実施しました。主旨に賛同いただいた3社の企業様にご協賛いただき、幼児向け防災教育用の絵本を作成し、横浜市内の幼稚園児の為に約55,000部を無償配布することができました。

To protect the children's life

We made a plan and published "a picture book about disaster" as a private cooperation project with Yokohama. Collecting sponsorship, we made a picture book for infants to teach them how to act when the disaster strikes. We distributed the book about 55,000 copies to the kindergartens in Yokohama City.



ヨコハマ・パラトリエンナーレ 2014

partner NPO 法人スローレーベル
NPO 法人横浜スタンダード推進協議会

障がいのある人との出会いが開く明日への扉。

「ヨコハマ・パラトリエンナーレ」とは、鋭い知覚や能力のある障がい者と、高い技術をもつ多様な分野のプロフェッショナルとが出会い、協働して新たな芸術表現を生み出すことを目指す「もうひとつのトリエンナーレ」です。パラトリエンナーレ総合ディレクター栗栖良依さんとNPO 法人横浜スタンダード推進協議会理事長も務める当社社長がタッグを組み、「ヨコハマ・パラトリエンナーレ2014 障がい者の鑑賞交流デー」での企業ボランティアが実現しました。来場された障がい者の方へ展示作品の色や形を説明しながら、1～2時間かけて一緒に鑑賞しました。

Opening a new door through meeting with people with disability

"Yokohama Paratriennale" is another type of 'Triennale'. 'People with Disabilities who have excellent ability and perception' and 'professionals of various fields' meet and create a new artistic expression together. Ms.Yoshie Kurisu, General Director of Paratriennale, and Mr.Koji Emori, President of Kyoshin Printing and Chairman of Yokohama Standard Promotion Council, worked together and participated in volunteer activities at "Yokohama Paratriennale 2014 Exchange and Appreciation Day for People with Disabilities". Ms. Kurisu and Mr. Emori watched the exhibited works together with those people who attended this event, while explaining them the detail of the works..



スローレーベル

partner 横浜ランデヴープロジェクト
NPO 法人スローレーベル



多様な人材との出会いによって生まれる、
モノ、コト。

アーティストと企業を繋げて新しいモノづくりを、と2009年に始まった横浜ランデヴープロジェクト。その中から生まれた障がい者とクリエイターとのコラボプロジェクト「スローレーベル」に私たちは立ち上げから協力しています。マスプロダクションからスローマニユファクチャリングへ、新しい時代の新しいモノづくり・コトづくりを始めています。

Many products and events are born through meeting with variety of people

“Yokohama Rendezvous Project” started in 2009, connecting the artists and the companies to make new products. Through that event, a new project, named “Slow Label”, made a start to connect the people with disabilities and the creators, Kyoshin Printing has been supporting this project from the beginning. We have started a new style of production, as slow manufacture tends to take the place of mass production.



女性活躍推進プロジェクト

partner NPO 法人スープリズム



輝くママと家族を応援しています。

仕事も家庭も全力で取り組みたいと願っているママたちへのサポートを軸に、関わる家族、社会も含め、ワークライフバランス改善のための活動を行う NPO 法人スープリズムの活動に、社をあげて参画しています。企業への女性活用セミナー、ライフスタイル提案のイベントなどを通じ、沢山の笑顔に出会えることを願っています。

Supporting Moms and the families

We participate in the activity of NPO cooperation ‘Souprism’, which supports the mothers who are eager to both work and do the housework at their best. ‘Souprism’ aims to improve the work-life balance and plans to have events and seminars for companies and give a suggestion about the lifestyle.



協働事業

産学協働プロジェクト

partner 横浜デジタルアート専門学校
横浜デザイン学院

若者の感性が社会を動かす原動力になる。

神奈川県内の専門学校との産学協働プロジェクトを企画実施しています。これまでに、「ママさん向けのドライブマップ」の作成や、NPO法人のポスターやフリーマガジンの企画デザインなど、4件の協働プロジェクトを実施。その他、インターンシップ、コンペ、アルバイト等、本業を通じて若者のキャリア教育支援を実施しています。

Young people can move the society with their sensibility

We plan and accomplish a collaboration projects with technical schools. We already carried out four projects, including "Driving Map for Moms", a poster for NPO, and a free magazine to publish. We are also supportive to career education for young people, through accepting them as interns and part-timers.



各種認定

環境に配慮した印刷方法、情報セキュリティへの対策、社会への貢献を継続し、お客様に安心して頂ける会社であり続けることを目指し、各種認定を取得しています。



E3PA 環境保護印刷（クリオネマーク） 認定

2006年2月 認定

<http://www.e3pa.com/>

グリーンプリンティング工場 認定

2007年6月 認定 2013年6月 更新

<http://www.jfpi.or.jp/greenprinting/index.html>

PISM 印刷業情報セキュリティマネジメントシステム 認定

2013年3月 認定

<http://www.kanagawapia.or.jp/pism.html>

横浜型地域貢献企業 認定

2009年3月 認定 2013年3月 更新

<http://www.idec.or.jp/keiei/csr/>

全印工連 CSR ワンスター 認定

2013年6月 認定

<http://www.aj-pia.or.jp/csr/main.html>

時代の指針となる協進印刷のCSR



横浜市立大学CSRセンター長
影山摩子弥

印刷業は苦境にある。近代を支えた第2次産業は総じて、中国などの新興国の追い上げにあい、厳しい経営状態に陥っている。その中で、協進印刷のCSRは、業界のみならず、日本の中小企業の方向性を示すものと言ってよいだろう。

CSRは、利害関係者のニーズや期待に応えることによって存続を図る経営戦略的観点である。協進印刷では、印刷業に求められる環境や情報セキュリティ、感性価値を軸とした品質に取り組んでいることに加え、残紙をノートに製本し東北被災地の子どもたちに届けるという本業に結び付いた社会貢献や、地域に根付いた中小企業の戦略として重要な地域貢献に積極的に取り組んでいる。

しかも、それぞれの取組みの質を客観的に示すために、積極的に認証を取得している。たとえば、グリーン・プリンティング認証、クリオネマーク（環境）、PISM（情報セキュリティ）、横浜型地域貢献企業認証、全印工連CSR認定（CSRないし品質）などである。

マクドナルドのチキン・ナゲットやベネッセの情報流出事故は記憶に新しい。すなわち、取引先にまで目を光らせていなければ、不祥事の元となるのである。しかし、取引先の取組みを詳細に把握することは難しい。そこで、得意先の安心のために、第三者認証によって取組みの適切さを客観的に示すことが必要となるので

ある。しかも、協進印刷は、CSRに習熟することによってCSRに関する提案を顧客企業に行おうとしている。お得意先にとってこれほど心強いビジネス・パートナーはいないだろう。このような取組みが「選ばれる企業」への着実な道程となる。

また、CSRは、取組みを利害関係者に伝えることが重要である。協進印刷の取組みはホーム・ページに掲載されているが、A4で8頁にわたる自主発行紙『JO』が興味深い。自社の宣伝がなく、社長とゲストとの対談や地域の紹介から成っており、利害関係者である地域社会を盛り立てようというコンセプトが感じ取れる。協進印刷の姿勢を伝えるつくりになっているのである。

ただ、ホーム・ページに経営理念やCSR方針、取組みが掲載されているが、理念や方針と各取組みとのつながりが説明されていないため、情報が体系だっておらず、バラバラな印象がある。そのため、利害関係者が協進印刷という企業像を形成しにくい可能性がある。

また、CSRは、取組みが社会にとって、および、自社にとって意味があるかどうかを検証し、取組みの改善につなげてゆくことが必要である。外部に出にくいデリケートなデータもあるので公開する必要はないが、自社なりのものでよいので効果を測るための指標を設定し、そのために必要なデータを収集し、自己評価を行い、改善につなげてゆくといえよう。

2014CSR報告書

発 行：株式会社協進印刷

発行日：2014年11月27日

〒221-0003 横浜市神奈川区大口仲町108

TEL.045-431-6611 FAX.050-3730-6273

<http://www.kyoshin-print.co.jp>

見返しの写真について

表：大口仲町106番地付近交差点より弊社を望む

裏：大口通商店街 湘南信用金庫前

store
セイジョー

いっしょにいませ!
本日
特売日

いっしょにいませ!
本日
特売日

100
100
100

EL

ソアラ

7630





SLOT

SLOT

たばこ
大入口

apis

apis

たばこ

<http://www.kyoshin-print.co.jp>